915

鬼神於松一代記
かまつ

無兵工

つぎ
かまつ

「つぎ」なるいはは注松笠屋又金
もと貸付る利を貪らんと
邪欲僅ばかりしをお松
人を湯が金をとる
貪らんと
を湯ゐ巣
りを貪ごふ
妻はもとのこと
為をもとべ
を湯も
元より
業本

お松

よなくを
を湯番とへども
お松が色
番よ迷ひ
一度抱とへ
まの涙きもひよ
沈をうん沈ものの
おれとい家あるを
しては爽と初めとて
面の藤月も番の爽も
づを湯もひ
沈へ入業業きふまり迷めとお
業業

雲助

雲助

粉菴
おまつ

つぎ
粉菴

つぎ　ゝうゝせべ妻情
きちりみ色ぎとび
今いかどう博へべき
粉蕎おまつへきづ
つた乱りぐゝくる
さんとをおれいを
乱れ搏ひのみ
妻もりまへ

雲助

丈とのりる糸
うち解さくいろ人ども今い
乱ともあり器くて且よ
つけても業師とのロ弘

無兵工

よ牡む
ゝりり
見おのこと
を変あくる
りや
叫月
ちりかあの
女房とう
ちあはして
うちりゝや丑べ
粉蕎ゝ大ひよ
ゝ改まりし

おまつ

▲ゝ義ロ乃ガ牡
ゝゆゝりゝ二ツ色ゝ令
でも事でり者とヤ太

太さうや
仰せ
博ゝ兵
を
業余
の義よ
あゝ毛
師
とのロ兎
ゝ粉方の
ゝ業そまと

粉蕎

次へ

つゞき

毒害色
めへを殺そとおもひ
へとのことくいひて殺
害い仰天ー殺
害ー云事申ます
しどもお松い殺
害が殺害ぬた
とう魔よ殺害の
作事ーと殺害へ
お前めをいはゞ殺
しが四方い仰山生
害多ぞ仰山と

雲助

殺害をグラ名人やう我
お松のことを書くよりひ
殺害を殺害ぬた
なべ殺害の
主殺の
生えた今さ
ちとさ

ぬへきもせぬ
うるさるを
うち帰ー

おまつ

おまつ
今更よ妻ぐ
て生て居ると
死ぬまへ
とぐけうう殺べ
明日の
よ金くと紙
朱ー帰と生て
殺害へうち出へ

ひとし
再(ふたた)びお松(まつ)のもとへ参(まい)る主人(しゅじん)へ
金(かね)をさし上(あげ)ばかり迄(まで)物(もの)をもぐ
一礼(れい)をしてお松(まつ)へ早速(はやすみ)おくり
ものをとて金(かね)湯(ゆ)ふくろ[illegible]
[illegible]もとふ悦(よろこ)びてあとを
くくりのもぐ包(つつ)み仕(つかま)れ
解(ほどき)包(つつみ)

お松(まつ)へ帰(かえ)るよう
粉屋(こなや)とも眼(めん)
[illegible]の
[illegible]
おそらく手(て)[illegible]
と例(れい)をとる
おそらく毒(どく)湯(ゆ)にあ
るやと思(おも)て粉屋(こなや)ハ
大(おお)ひに驚(おどろ)き[illegible]
どももいまだ[illegible]
粉屋(こなや)が弟(おとと)なる[illegible]
[illegible]と大(おお)をと責(せめ)[illegible]
雲助(くもすけ)[illegible]
つゞく

つき
喜次郎

おまつ

一 新板二用袋入 濃切物 六十番

一 新板岡北ごろう紙 はうそう 大津絵 三十番

一 合本二用冊冊 袋入 濃切物 十二番

一 白雄素物 三十番

一 中本用文字引 等法基地 品々

一 色の小本 墨の小本 品々

一 切付上下代紀 実録物語 百番

一 かな反故紙 品々

書物 錦繪 地本 問屋

東京横山町三丁目

辻岡屋文助